

金丸座（旧金毘羅大芝居）

1835年に創建された金丸座は、現存する日本最古の歌舞伎小屋（かぶきごや）です。江戸中期、金毘羅大権現（現在は、金毘羅さんや金刀比羅宮として知られています）が国内参拝の聖地になったことで、琴平に全国から参拝者が集まるようになりました。彼らを対象として、仮設の芝居小屋で年に数回、歌舞伎と他の娯楽が提供されてきました。そして神社を中心に街が発展・拡大していったことで、金毘羅大芝居が巡礼者を楽ませるため、常設の歌舞伎劇場として建設されました。1900年頃には金丸座と改称され、その時からその愛称で知られるようになりました。

1970年に重要文化財に登録され、1972年から4年間かけて現在の場所に解体・移築再建されました。2003年には復元作業が始まり、劇場は元の江戸時代の姿に復元されました。

1984年には、金丸座は歌舞伎界の注目を集めました。二代目中村吉右衛門（1944-）、二代目澤村藤十郎（1943-）、五代目中村勘九郎（1955-2012、2005年に18代目中村勘三郎を襲名）という三人の有名な歌舞伎俳優が、金丸座を特集するテレビ番組の取材のために訪れました。これにより日本中に金丸座の名が知れ渡るようになりました。彼らは金丸座の独特な雰囲気や伝統的なデザインに魅了され、これが定期的な公演を開く契機となりました。1985年6月末、二代目中村吉右衛門と九代目沢村宗十郎の率いる一座は「再桜遇清水」（初めて清水で出会った後の桜の下での再会）という演目と、「俄獅子」（勇猛なライオン）という舞踊を金丸座で上演しました。

1985年から毎年4月（5月）に「四国こんぴら大芝居」という興行が行われるようになり、歌舞伎が上演され、四国の春の訪れを象徴する行事となりました。東京の歌舞伎座に出演されるような著名な歌舞伎俳優も出演し、観客は歌舞伎が本来上演されていた、江戸時代のサイズの劇場で、舞台や花道に近く、役者への親近感を感じながら、臨場感あふれる歌舞伎を楽しむことができます。